**かわいそうな　ぞう**

**土家由岐雄 　さく**

**上野の　どうぶつえんは、さくらの　花ざかりです。風に　ちる　花。お日さまに　かがやいていて　いる　花。その　下に、どっと　人が　おしよせて、どうぶつえんは　こみあって　います。**

**さきほどから、長い　はなで　らっぱを　ふきならし、まるたわたりの　げいとうを　つづけて　いる　ぞうの　おりの　前も、うごけないほどの　人だかりです。**

**その　にぎやかな　広ばから　少し　はなれた　ところに、一つの石の　おはかが　あります。気の　つく　人は　あまり　ありませんが、どうぶつえんで　しんだ　どうぶたちを　おまつりした　おはかです。晴れた　日は、いつも　あたたかそうに、お日さまにてらされて　います。**

**ある　日、どうぶつえんの　人が、その　石の　おはかを　しみじみと　なでながら、わたしに、かなしい　ぞうの　お話を　聞かせて　くれました。**

**今、どうぶつえんには、三とうの　ぞうが　います。ずっと　前にも、やはり、三とうの　ぞうが　いました。名まえを、ジョン、トンキー、ワンリーと　いいました。**

**その　ころ、日本は、アメリカと　せんそうを　して　いました。せんそうが　だんだん　はげしく　なって、東京の　町には、朝もばんも　ばくだんが、雨のように　おとされました。その　ばくだんが、もしも　どうぶつえんに　おちたら、どう　なる　ことでしょう。おりがこわされて、おそろしい　どうぶつたちが　町へ　あばれ出たら、たいへんな　ことに　なります。それで、ぐんたいの、めいれいで、ライオンも、とらも、ひょうも、くまも、だいじゃも、どくやくを　のませて　ころしたのです。**

**いよいよ、三とうの　ぞうも　ころされる　ことに　なりました。**

**まず、ジョンから　はじめる　ことに　なりました。ジョンは、じゃがいもが　大すきでした。ですから、どくやくを　入れた　じゃがいもを、ふつうの　じゃがいもに　まぜて　食べさせました。けれども、りこうな、ジョンは、どくやくの　入った　じゃがいもを、長い　はなで口まで　もって　いくのですが、すぐに、ぽんぽんと　なげかえしてしまうのです。**

**しかたなく、どくやくを　ちゅうしゃする　ことに　なりました。馬に　つかう、とても　大きな　ちゅうしゃの　どうぐが　したくされました。**

**ところが、ぞうの　体は、たいへん　かわが　あつくて、太いはりは、どれも、ぽきぽきと　おれて　しまうのです。しかたなく、食べものを　ひとつも　やらずに　いますと、かわいそうに、ジョンは、十七日目に　しにました。**

**つづいて、トンキーと　ワンリーの　ばんです。この　二とうは、いつも　かわいい　目を　じっと　みはった、心の　やさしいぞうでした。わたしたちは、この　二とうを　なんとか　してたすけたいので、遠い　仙台の　どうぶつえんへ　おくろうと　考えました。**

**けれども、仙台にも　ばくだんが　おとされて、町へ　ぞうがあばれ出たら、どう　なる　ことでしょう。そこで、やはり、上野の　どうぶつえんで　ころす　ことに　なりました。**

**毎日、えさを　やらない　日が　つづきました。トンキーも　ワンリーも、だんだん　やせほそって、元気が、なくなって、いきました。ときどき　見まわりに　行く　人を　見ると、よたよたと　立ち上がって、**

**「えさを　ください。」**

**「水を　ください。」**

**と、ほそい　声で　せがむのでした。そのうちに、げっそりと　やせこけた　顔に、あの　小さな　目が、ゴムまりのように、ぐっととび出して　きました。耳ばかりが　大きく　見える、かなしい　すがたに　かわりました。**

**今まで、どの　ぞうも　自分の　こどものように　かわいがってきた、ぞうがかりの　人は、**

**「ああ、かそうそうに。かわいそうに。」**

**と、おりの　前を　行ったり、来たり、して、うろうろするばかりでした。**

**ある日、トンキーと　ワンリーが、ひょろひょろと　体を　おこして、ぞうがかりの　前に　すすみ出て　きました。おたがいに、ぐったりとした　体を、せなかで　もたれあって、げいとうを　はじめたのです。**

**後ろ足で　立ち上がりました。前足を　上げて　おりまげました。はなを　高く　高く　上げて、ばんざいを　しました。しなびきった　体じゅうの　力を　ふりしぼって、よろけながら　いっしょうけんめいです。げいとうを　すれば、もとのように、えさが　もらえれると　思ったのでしょう。**

**ぞうがかりの　人は、もう　がまん　できません。**

**「ああ、ワンリーや、トンキーや。」**

**と、なき声を　あげて、えさの　ある　こやへ　とびこみました。走って　水を　はこんで　きました。えさを　かかえて　きて、ぞうの　足もとへ　ぶちまけました。**

**「さあ、食べろ、食べろ。のんで　くれ、のんで　おくれ。」**

**と、ぞうの　足に　だきすがりました。**

**わたしたちは、みんな　だまって、見ない　ふりを　して　いました。えんちょうさんも、くちびるを　かみしめて、じっと、つくえの　上ばかり、見つめて　いました。ぞうに、えさを　やっては　いけないのです。水を　のませては　ならないのです。けれども、こう　して、一日でも　長く　生かして　おけば、せんそうも　おわって、たすかるのでは　ないかと、どの　人も、心の　中で、かみさまに　いのって　いました。**

**けれども、トンキーも　ワンリーも、ついに　うごけなく　なってしまいました。じっと、体を　よこに　したまま、ますますうつくしく　すんで　くる　目で、どうぶつえんの　空に　ながれる　雲を　見つめて　いるのが　やっとでした。**

**こう　なると、ぞうがかりの　人は、もう、むねが　はりさけるほどつらく、なって、ぞうを　見に　行く　元気が　ありません。ほかの人たちも、くるしく　なって、ぞうの　おりから　遠く　はなれて　いました。**

**ついに、ワンリーも　トンキーも　しにました。どちらも、てつのおりに　もたれ、はなを　長く　のばして、ばんざいの　げいとうしたまま、しんで　しまいました。**

**「ぞうが　しんだあ。ぞうが　しんだあ。」**

**ぞうがかりの　人が、さけびながら、じむしょに　とびこんできました。げんこつで　つくえを　たたいて、なきふしました。**

**わたしたちは、ぞうの　おりに　かけつけました。どっと　おりの中へ　ころがりこんで、やせた　ぞうの　体に　すがりつきました。ぞうの　頭を　ゆすぶりました。足や　はなを　なでまわしました。みんな、おいおいと　声を　あげて　なきだしました。その　上を、またも、ばくだんを　つんだ　てきの　ひこうきが、ゴーゴーと、東京の　空にせめよせて　きました。**

**どの　人も、ぞうに　だきついたまま、**

**「せんそうを　やめろ！」**

**「そんそうを　やめて　くれ！やめて　くれ！」**

**と、心の　中で　さけびました。**

**あとで　しらべますと、たらいぐらいも　ある　大きな　いぶくろには、一しずく　水さえも　入って　いなかったのです。**

**ーその三とうの　ぞうも、今は、この　おはかの下に、しずかにねむって　いるのです。**

**とうぶつえんの　人は、目を　うるませて　話しおわりました。そして、ふぶきにように　さくらの　花びらが　ちりかかって　くる　石のおはかを、じっと　見つめて　なでて　いました。**